反古懐紙

新宮圖書

早稲田大學圖書館

へ5
1825

へ 5

丹後寿として事は忘られ我をのみそれらんは
うれは芭蕉の翁一面の中にも元禄三四年
古れ風調抜さとうして常に讃古ゆへ
いつも年ことに律に如知られし上一様ならず
あれは石ろ良いのおもかひおもひはりの人れ
耳うし御おもはゆくれ書う出しこちゃ
らうんと記識む

戊午秋

為麓庵花人

とあかすくは芙蓉子秋を尽すらり
徐さくなれし新元　れ　月　　暁
二三番孫形の妻へ語も付　　花外
つるの蘇樋の土にもおもて石　　楷
入野りみすり付る中へ圓附方　　暁
末潟れ春ふるかされ日あらり　　外
さし備の小車はさも同しふさ　　楷
ちより仍とひとまり蔚し庵丁　　暁

(seals)

呼子やる法師の琴をおさまりて　外

ふとん戸棚へのこす十斎艶　蓍

うちこみし古い娘ばなれてはまき　暁

こさめのまふ子の志月と尽る旅　外

居たいふ飽小袖の撰撥子の　蓍

張てしらるみえ音銭とめる給　暁

きらひし棒まうけをせ一月の宮　外

乃とたれそてこまし男藩帖　蓍

霧籠て手がらを肩に引かけて　暁

札の文かけ赤裲の旅主　外

身もうす出歩きえる巡目鏡　蓍

取りとりさ老人牛子稀をやる　暁

何事もおふいふれかしこの文　外

わらいきふ年玉の筆　蓍

桜の寒角は清すまる菓蝶　暁

古の相ふ籠まあはけの夕く　外

おもしろき顔へ扇につまりたる　甞
ときの川柳の志おもり燭　暁
清延の節も西方ひのしまし　外
請ふ番飯は飛んで谷へ行く　楚
唇ろくなるは猫のうつされし　暁
あり川の吉つきとなきれ寛時　外
こりたる銭洗は何の事もなく芝草乳　楚
すこし簾をまへうけにける　暁

講伴れ集まるは肺の厨子　外
路銀は落ちに野らへ行く　甞
めづらしと月も見あかる所もなし　暁
狭きあきまものうちに利猫　外
二丿
家並れ中に花れ上手下手　楚
膳のもめ名ふ小、誰へ子酒　暁
あり川のいも顔つけ亡き事に離れ際　外
神ろひさかゆく花の雪砂　甞

高ひれ二え子ろ曲る床下信　暁

みきもひくりもと申むの梅さ　外

柔荒すれ荊犯世帯り嬉しかの　砦

采くしきもふ三宗まとのし　暁

月よりと新の匠ひれ以携とのうと　外

此蘇親新くま代あつ代着　砦

河まもまかさ床以のほめり宮まれ　暁

本まみをもれよあつまの中櫂　外

えいきらふゆん加称さ縁をさふお淡神　砦

蜩をとはの来れ高錢坂まし　暁

隣蔵寄まも自ぬあまおもふつるさ　外

乃りけまそ教行とまうふ加縦木　砦

新数のおみりをつまふ所原のあ　暁

恵光まもり川る行しれみてる恋ふ里　外

川それは鶴ぬみてるの噂かまて　砦

町ともえ節しくまつま来時宇　暁

志らすハいつも重ね八船の灰　外
擣ほのかりに絵なぞ辞し　擣
うつりと被れ若も移らせ尼　曉
樓に色は毛絶めいでく古佛　外
回廊の新月にまた小僧のむと　擣
もの影ゆきうき町の中の花る　曉
白川は室も錦さる月の秋　外
元ぎきうしまお市は新酒　擣

東都の田も暖くなりて燕舞ふく　曉
さしはなもし蘇鉄女わる鉢　外
氣つかしく時候にうつりも好ミハ久　擣
庭にみなのつくみ尾ある緑植　曉
中ゝきまぬけさうにも歎きハをさつかり　外
坊もけ浅し姥ゝ惜みに見え参へ　擣
家猫も老いる猫によく三毛の妻　曉
捌れまの猿君と何称る　外

夫てきも山ニ新年のれた申こう好く　嗜

字川もくきりは枝をかへく　暁

今もみ了波れた谷の法くこの　外

記戸と手於　用を續きそのまと　嗜

月もむち稀れひくそたくこみ　暁

爐ハみきこのきく大桐赤く秋く　外

名

湿縣舎れ轉も寄毛く北東より　嗜

昨もの往年哉りけらりかり　暁

観桜ハ南海の直下くまひすむ　外

何ともつ南く南東ありすぶ　嗜

苅るきり井戸北車内ちの瑠　暁

諸貨の名子　猿も州る面　外

高那もふ形の春に手形の黄より　嗜

出こ年明く所をほとれ支　暁

櫻津ふ上様のかハ南を解釈て　外

高越物く夕に　拱す　賛兆毛　嗜

たゞ一夜ゆへ八坂の花も続きけり　暁

有しハ呑めを我人ぞ笑ける　外

いさ目如細く寒し旅の月　楮

鏡粧ちけ嫁の錦に出かける　暁

ナウ
ふと髪結に浅黄をりく継は紐　外

扇をれ一めも己がやうに好る　楮

傘持を使の陰くひの走り出　暁

年季来しまむし侍橋ハ座き艶　外

まりまへ子家知れをつる料理代　楮

墨絵ぞくさく識ふ小硯　暁

有るやまちのり江京に依托て　外

同銭屋さへめく八笠子を付蝶　楮

野ゝ雪や鶴帰りくる宿まし　由誓

春らく成れ水も氷川　完鶴

ひとり住て刀を借よかつの市　抱叔

身はしらく志く採れ薦つ星　誓

出家も帰く志ら精掛ゐ菜　鶴

うらみきく初く看別れ懐　叔

月の形れ影形に隣をいふ里　誓

身みのみられ火を擣る橋に作　鶴

ウ

若狭君衣して小鉢理をすまの宮　紆

身からしれぬ在て亀なの　誓

髪振く麻をて捨まし籍龍　鶴

浅く形く庵も一代氷を汚　叔

身ちる稀ると精れ葉銭法の道　誓

作事つらくれ見つくうまと昼　鶴

八寺のうちれ如しの雨も新し　叔

もまとく影れ紙を以きくの上　誓

月ゆ涼しうおきまて浴れみて泓庭　鷗
たまのおよ根ざはしく香柔　琳
左右ハ世事を学んでためまし　哲
堂あまくちの外まなんての初め　鷗
そらまけれ庵屋ふさ新らし　叔
隣よ田擲ぶあまても開よ　哲
二
たて菖は阿蘭ヶ東に鉢まれて　鷗
麻くころあえ人との侍也　琳

しるすま古風になりし有馬筆　哲
去り浜鴻舟於み舟ハよろこぶ　鷗
蒼承り揃句たありとも居間　叔
二月れみちうり田り廾尺し　哲
子の無事を答けば帰に秋祭して　鷗
すりし嘘そのしく鏡れ枯たま　琳
京のとく女の袖ハかつらきし戻　哲
いくらし焼しにうしみ中みゆる　鷗

浜垣は隣もかしく吹倒れ　叔
こゑめにみえてもきこゆる御陵　誓
松明をふるあけれ月　鷗
蛇まとひ一山納めよ人夢　研
二
あそいふもの銭穀のよは隠れて　誓
居まはり奉りおくと六十をとらん　鷗
折節は扇もたる小唄芳子　叔
さらの練なの夢の暁ころ度　誓

鉄漿つけもらはむ鏡湯と雨　鷗
誰の推さいもちらへのさたる恋　叔
すゝめてぬけ月まへ隣まかれ　誓
百味絵てかまへる上下　鷗
夏ちうま付月おある傍ぞへ　研
籟て彼めのまれ木を嗅ぐる　誓
ひとつて被く入うまうゐ一窠　鷗
連ゝりこの此く水有をゆく　叔

三

ことしの花はまた志らぬ寺　誓

家根うへに飛ちる[illegible]細き声　鷗

暁のやみに拝[illegible]摘は[illegible]そて　卅

はしはしはけりける[illegible]ゆる　誓

高きよりうちまもる秋の[illegible]に　鶴

見しは一夜のはなに附の雲　叔

絵師の[illegible]かされ[illegible]　誓

門は[illegible]るよりあれ[illegible]　鶴

打[illegible]ていまに風[illegible]て　卅

ちらり見え[illegible]寒[illegible]　誓

はなされ[illegible]の屋[illegible]を仕[illegible]け　鶴

それをとめて[illegible]まへ[illegible]　叔

守[illegible]年[illegible]の[illegible]帝[illegible]　誓

かはしては[illegible]をたくし　鷗

とはつる月もむしをたのみ　叔

小四尺ひろく樹々の葉[illegible]　誓

十一

峠雲をいふへき見る鏡の袖る　鷗

みなとの吾とあまれ禄豆の言哭　舟

喪者師れは多業に唄へてまれ　蕉

あちらひの後く劉むも弟茶子　鷗

翔わに深谷ときそそとも銀杏ち　舟

めしへ大のはりきめる鮮　入　蕉

重子そ友よ秋新人ハ居りし里　鷗

勝ちある字銭腋く石橋　叔

若

梅か香さあふへ营日を絡　蕉

燒耐の祈ゞ肩れら印この　鷗

とし哉と羅みえ翁やも向伊女　舟

きつめもえへてゆ津の雁　楮　蕉

氣まをもゐて終の兼もれわかける　鷗

梅く君を田ふ菖蒲の所る　舟

ちりふかれよ旅ふ右る京の末　蕉

健うちうて花もし　撰竹　鷗

借銭のけふもくるゝ情なき　叔

橘娘菜しまはり寒むしお　誓

手入もなかれた挿頭をつゝむ庭　鶴

さらした井戸は杉の葉末淋し　圩

関まもし素れかてる世の時　誓

はかなく懐にひねる香の粽　鶴

親田兄に世をまかせての身の寄　叔

なにくら人気に乞はる　誓

まやくと水を嗅さる帆にきて　鶴

ちのくらやみに並ん諸所の家　圩

乃至るれ馬敵に来り雨の月　誓

節ぬくとより風なのにしむ　鶴

ナウ
うろ寄るゝ身の雰はれ咲も悦　叔

馬れ草鞋とはくる寄小屋　誓

秋の日は扇をうたみしなきに　鶴

いつもそのうへに暇しもまへに　叔

なかかれ神ハ志ハぬ木さかれし　董

蜂も蝿のさかり　雲もうしろ　鷗

けふ君まさきもさかる秀をはらひ　叔

うすかすみ囲しく鼠も飛ふかな　董

野ハ兎もかふハ手折りのあしらひの　由董

さ川春風うゝふ花のゆするゆる　樹石

此君館の五時鐘打を算へさく　尾村

あれまをの筆洗ひおく　董

一寸居る程もたゝむ勝たく　不

乃さうし野かつる　以　時　村

天の月を打きのうつし赤色り　董

寵一羽はらふてゆるく納豆　石

ウ

摘ミ山のきたけつける冷　村

積ゆく深しあつめ長持　誓

志のふのとこ[illegible]ちる噂はひ　石

阿りしもの[illegible]尊[illegible]之[illegible]　郁

暮も[illegible]寺の料理よ精す[illegible]　誓

[illegible]舩れ[illegible]をふく　石

親[illegible]の出[illegible]見え[illegible]の撞　村

[illegible]月二[illegible]　誓

庵[illegible]布[illegible]　石

[illegible]かくれ[illegible]業　村

[illegible]　誓

聖れ[illegible]の[illegible]るる　石

さ[illegible]風　村

原[illegible]鴨　誓

[illegible]札　石

[illegible]れ[illegible]な　村

二

萩の戸る豆腐くれ草鞋かな　誓

あはれむしきくる妻や子　石

花雫作ハうち見く朝に果　村

十四五もあらん坂に雲ふり出む　誓

河の浦ハ更くすゝ船は海の里　石

尤れも白の月も川る年も　邦

鳥極と渡らへ一番れ漾状　誓

東きしろ寒さの秋く雪洞　石

澤ねもたつ秋ならぬ色中　村

この中まゝ物も所ぞ宮と出く　誓

加ゝむくと鏡ハ打をある打ひ　石

うゐ例れ芹も刈れぬり　邦

稲本のうちまけたる餞別　誓

住居むけて虫めら酒　石

訳のしくさゝのみ持つ瓶嗜びの音　邦

被れいかのてのうき秋雨しみ　誓

たれ行くと志る人もなし摘かな　石
清水のながるゝ水上の田ふ　沛
古保ある社は廣く八建ちもなく　誓
六ケ所の鳩の一羽飛まふ　石
日をひる雨でのしらす都かし　村
作りみれ血の志ん蓮あかつる　誓
主従の知りふる金杖りし参る　石
宗也おかれく以らふるし坊　沛

三

年ふかく鬼くに絹の文月のかな　誓
高き蛇横れかうへまへてなく　石
居年の巌戯園ふ麻の下　沛
めでたい星の契りうきあれ　誓
世の中を嘆き蛇根底日すまさみ　石
かたらいそめ寺と周との枕　村
両君の間持ちて月和ぶ尺極めて　誓
おそろしき又のけるなれ　石

むさしのゝれ娘さも例へ川よせる　村

破れ菩薩心のさし枕抱れ灸　誓

皆了師の筆をまねかしあい　石

来等路をふむも十とさふり也　村

うけおひの風をこゝに橋薬給　誓

うりし誹紙らくと偽く　石

賤まの鳩も黙月ハ痛そむて　村

木涼れなきのあとし妻慎の石　誓

えし
杉の葉紅葉の落霜つよく実けり　石

耳れすゝめをはらひさ見れ　村

加賀絞長小袖ハさほり染き見る　誓

初穂れ誹銭従ふ此井戸　石

拙あふ申し碑説一旅立ちれ　祁

あさふあなれて楽まれ結　誓

為母の鷹の月まる田まい離れ加ね　石

年代はさひよ川を細帯く　村

月のものたえつまりて孫待也　誓

扉杖をつきて来拾の音戸　石

あらはれて継母の苦労を嘆　祁

よしなふ事も志やんと思ひ帯　誓

水汲に神の桜をいはれなく　石

雪にいもあや花のさかの高し　村

岩

頬白の宗祇の笛に来き哥し　誓

ころも肩にかけて毎年やすらしむ　石

無用なる蝶は月の夜の茶代持て　村

はきゝのつかみも持て参りし長袖　誓

きのふは芳志戯場の貝をつけ　石

おくへ通る我里までも踏出す　村

秋さ来て南に弦れ荊白く　誓

大風の日かなへ続く秋の末　石

うらみの山を東へ序にかへし　村

椋をあさし独もりしつかに在　誓

かちまゆへ浅ほしかの宣命ありて　石

浅青中さららの御神ふさくる　村

月かんき入かいとしのびひきこゆのま　瞽

花穂の鳴れをきまりし稲　石

ナウ

さしまくは撥手新てる柳え波　邨

侍女れひくむ纏れ見雅　瞽

之綴れ衣とひく御ゆ中末まれ　石

くりかへ轉のもなかれ揺所　村

赤くへ入方きぬし麿呂裳の裾なる　瞽

疎みよ来る竊れ蝶をよふ　石

風かれつくもの雲のま揚かる　村

滝きま紀みれころ十約束　執筆

新茶やさかれ申候得共薄手　由措
着こつき袖れ合まま帷子　波鴎
青簾の宜鮮家く麁そ宜いの　拙僕
すこし簾をあ奉る家まの　措
水通ですや手遣りし茶屋の庭　鴎
袖くゑさてし右所れ松　誠
こらすと紀何れ候しお誠ミ方　措
乙ええもみまず浅やさく萩詹　鴎

ウ
庭神の条りまい楽く桐やかまゐ　誠
なうて備候むとえへく存まい　措
ふりらそ必然と衣かしれ呉様の宿　鴎
まま様ミ伺う用をもって次く　諫
茶釈も半年かる河し法りまま　誉
新樹れ隠ろえしまかも　鴎
やよ月まいらせ一程残引上く　誠
たは様く讀の誹銭尽お申く　誉

招るゝ出ぬる月に宿る露　路
菓ゝ蒸らけはきゝ小筆の実　誠
売手すれ小様に器をさそむ秋　揩
おとしゝおりすつれ谷波　路
咲きつ染やまあまてと花れ見　謀
風にたまれの礼揚屋の情むく　揩

二

売れ初の宿にも汚し障子てし　路
屋ふしきぬまへ誠しき末の子　誠

なをしくへゝ媚ゝ筆もさゝへたし　揩
揚屋から足をおりしつる葉　路
孫もの〳〵なくゝも家ある勇我の流　誠
傘さしうけゝ若あをときしも承　揩
ころか筆てきゝ宿れつのゝ白れ墨　路
借れ指くも添るる引まの　謀
ところもかゝのつゝらし因に　揩
木庫れ寿の月さもつやむ　路

みな人に賤れ難きをしへ也
自今まゐらせ候御おもむき
御指ハ三ツ迄ゆへ了治る様
御はハ出るも脇よりわけ候
二
唐織れ裁具ハ三年まて色よくて
佛習一度初の縁物のとより火
何をも子一通り早に移し乳をもち
すゝめ候をかね業つりの事

捨紛に紙きもて地出入抹持
順譲に所りく写すの語重記
おまへさま事申しまゐらせ候
庭れ猶庭くり地日系り
年寄ハ大事も気れ相らへき
御ゝ葉まこうらしおしあれ砕
来る人に書九のはつりて月数さし
角力れ古今に傳ゐ座両屋

誠 誓 路 誅 誓 路 誅 誓

路 誅 誓 路 誠 誓 路 誠

三

花ちりて下さへ掃ぬ跡の庵　樗
ちさこねきれ見あのる雨　露
みね文字懸振鉾もむつかしう　諫
次第に常人見ききれ曲難　樗
一むきしねハ門を出しまれ　露
卯の風形もありけむかきし　諫
川ねらう葉ばあかりあしのこ　樗
あきらをかねて聲も唄しき男　露

切れてきまに空ハ晴やきも　諫
傍をすまきハ鐘も打くしき　樗
ころえしき形あ根揺のつる茄子　露
東府つくらをおしてニさる　諫
涼ありしみ籠おれ寒けり　樗
秋も桐油を毎こ山揺月　露
月のわたるに出ねハやすぬ風　諫
掃きあらくあまる草まれ根まで黄　樗

入梅を添ても居れは雑餅　路
世済を見きかれ独鈷許のる　諫
たゝらちは白いれるゝまき尾竈　菅
いつとなる巴刹乃淌竹れいのね　路
刹那ともく法を避けれ那邊邊り　諫
好まれにはさすまゝ附白昤ちる　菅
羅をおみゝはゝ前れ何もれん　路
叶乎のしはみゝ以かとみ竹　諫

居

乱ゝくらは牡丹ゟ月を待くさ　菅
新暦れ出の古暦ゟうかへ　鷗
孫つゝく形れ形の会稽き　識
王子れ読経天井あまり　楚
はものあろうちお前しき居り　路
海老れまめくのひくさく陰　諫
ひくるは伴れまゝ好まれ　楚
國分居るれ京札をよむ　鷗

うしろからはらはらくまし鞘の音　沫
勝いやしきれこけを切のとて　誓
待人のきそくさらるをこそおきき　路
きらむ男も行く神鷹出て　誠
在ごと文の暮らける通り雨　誓
なかの流しに虫を休める　路
村若き揃ふるスなを番九鶴　誠
桜をおきつつのあ白菊　誓

はちくなの通りをふさし旅籠　路
六精進ても朝めぐのかね年　沫
声なきも月に鳴るは独代小屋　誓
破前れまかる花人それ相　路
たり紙ごとま長刀習ふ法師達　沫
たいらなきへま入下地麦まの　誓
日隠りに舞の隔れ河ごし南り　路
まとうも根く志めなかさる帝　沫

使ひかへし北華を呼来て　晢

薪菅を花ひとすよ於　鴻

まち月花のたゆまん脇つよ　誠

なかの舞のをむ笑出山家　魏革

色々日の隙さちなりきれ時　由晢

ひのりを毛まうふれうらくの　花外

須輪猶先よりさ柳をまこ毎　波鷗

手神工加し高原様の小文庫　尾邦

ひおつくく馬れ懐りれたてる窓　拙誠

肉れひうまま由称る待り櫛　秋暁

薪ますく腑り八月れへしあと　抱叔

ひとん於留ふくふし深館　揩

遠目にはちる萩の中もふかの野らへ　外

稲をりたしてこそ色も風呂布　路

あきらかにれをこそ節ミて言は何母　村

宇治も又見せやり待しまれ　誠

あやめしと待えるつまれ和作り　暁

わきのと大根ハちる物さんれ　叔

風れちるに涼れたし涼く　塑

脚もきの飛脚をちく稀めまれ　外

をみむきりうくおまへ今年し　月夕

なりまゆいくるあまり行ての川　宜夕

きぬく中見天尽き枯野のれ　只青

おもう嵐のすく虫ハ棲ゆのなりきむり　経行

まあゆきもいろあしやまうつか　東洲

おもひもいとややいつもみそさに　篤之

われらのもいえあるまゆやきもいむも　五休

ちつか梅と尽るをすまも答のれ　危年

若松も吉野川芦や海の鐘　三沼

鍋まつく掬きしあ伸く小寒の丸　之助

見えのちや香まうつもいく葉の花　知足

なまめきしうらまりあしれ所くきた　稲涛

夜月や松葉こあ重て垣の陰　如楓

さくなみの脚りや月らき野うち　青右

袖よ脚をぬくて八幡ともこの丸　對甫

燭台にあきまうせるう室のもて　誠

あすれ天ぷら紙とかうまれよ　暁

田うおいく鳥まゑ有ほ加さつの涙　耕

香はもとわのこれ茶筒柳続く　謷

二く

細縄も国の籐ゐとてつけ　外

きつふ新年しちろかあ来れ　路

姫をと来れ泊を置しけあれ柱て　村

一口まねる新潟の唄　誠

あさ川に[illegible]膝を[illegible]　暁

ふと鳴り出た神の[illegible]　叔

笈[illegible]国[illegible]　蓉

七つ過るとかされて[illegible]待　外

白髪に八[illegible]月　露

[illegible]の[illegible]　村

楫に[illegible]町[illegible]　誠

はきものに草[illegible]　暁

三

[illegible]　琳

[illegible]　蓉

[illegible]　外

[illegible]　露

[illegible]　祁

[illegible]　樹石

[illegible]　完路

[illegible]　誠

[illegible]　暁

[illegible]　叙

[illegible]の[illegible]　誓

[illegible]　外

[illegible]　波

[illegible]草鞋[illegible]　村

[illegible]月[illegible]の秋　石

[illegible]の[illegible]　完

三ノ

[illegible]　諌

[illegible]　暁

[illegible]　叙

[illegible]　誓

[illegible]の[illegible]　外

[illegible]　波

[illegible]　村

[illegible]　石

青すあをふ山鳥のむ瑞樹ゆく
筆をもちしをらけり勝負
優劣をわかち難ゆうしも経机
さいそもわかちる蘆屋根の土
花月にほされいろそ伸さわ由
記つかう手かう物つこ契つきる
此者とも離をかそれよ下序集
右
さるさに傳のともる先かゑ

完
誠
暁
叔
甞
外
波
村

其猶しれ秘のことへ四へい深くみ
もし兩しおもひ秋のあさゆの
けふハ此集風を傳ひ南ハ宮
つらゆき定ハ筋の葉葉
よる年をとひそのつく梅はゆく
備ふれつつはすそさハつ
市井ゆ川宿ハ此家も未題ゆ
もつ加へ乞きさ見る新れ物さき

右
完
誠
暁
叔
甞
外
波

ありや如武具ハ須磨之浦ゆりて　村

横れ寺の鐘さへかすみけれ　石

こゝろにも世に遊れぬ身もたへられ　完

許ふに手紙をと偏ら契りてゆく　誅

澳（チウ）茶も掃除をかゝえ、窓深き　暁

橘燭とひらく子も錦もある　叔

こゝちすれバ果にも僅かに遊ちれ論　蕉

日もかけれ、藤をまうちすゝ西例　外

秋風のふきに遊ばれ　波

酔例手こゝろ人れ勝ちなる　村

花のちるもの咲りてことし又　石

老ゆえれ健くまこゝろ梅の香　完

うき勝は世あらし此の風ならず　梅通
時らく切も椽し宗ちる　芹舎
みし隅に背く花川り暮の月　有節
梅をねらひ屋ゐも戸をしめけり　月彩左
ふらつくへなひく月ぬれ柳哉　帯一
筆の音の春さよし若紅　杉曾
光るなや草にともしちいさき蝶　議兄

見こそはし蘆のおくれ西横東　素庭

あさかほよいと柳のつゆ半ゆる　（スハラ）雨后

刈る稲のいほりくれ山田かな　士前

揺れかる秋風をひね月夜かな　梅理

満汐よい雨花飛[illegible]月見る　李騰

秋立や胸くるしき草枕　（ミカハ）蓮亭

月さえて見ての春[illegible]浦や秋の暮　完伍

はる[illegible]八里あるやおける　（スルカ）連山

ゆり据え人形者[illegible]きは　（サカミ）立亭

春柳や深う入まる[illegible]町　（チクセン）宗一

沫のしみ[illegible]秋の[illegible]は　（ヤマト）大芝

柳[illegible]なれ[illegible]　柳臺

おのひ[illegible]雨を曲[illegible]かつ錦　（セツツ）可大

菊[illegible]なれ[illegible]　（トホトウミ）萬谷

唯[illegible]あやの錦[illegible]まれ　（エチコ）乙良

大風[illegible]のおさまり萩の夕　菜山

色ゝ新に湖をとゝのへるやけ長侍　諸眺

月をたゞ人をまつにて宮までも忘れいとゞ月に　葛古

露ゝにあれも棗陰の下に梢明り　椿山

眺むるゝにかたをの梢く花之　由儀

行あるに家しろくも花くすゝるに　旭斎

夜文字のきし秋に鳴子れ初秋に　汎翠

春にえた梅ハ志つく九月　亀代女

時つまつて虫もたなりや露の宋　一止

月花の春もくもりたし秋や露の京　清民

月のきしく雨としるしも月蕉　みね女

折行秋中くゝに帰る露に　精窓

眺め尽しハ雲に花に明く夢はかり　御風

川風に渡戸八つる綿秋日　吟風

有明や二つは拝する蓮の戸　素山

眺る日秋あらし錦の残りに　一蜿

手の絹く秋気さしはるゝ乾干　萬玉

人ひとり揃ふ雨月のかれ　ムサシ 涼花

ちからや白らん萎の人ゝ　珠与

笠佛れ壱ヶ大足飛もいそへ　壽成

はめをりたゝへ露水玉　桃義

見る新や月に舞ひ人もなし　為山

恨をやしよう待もへすま眠猿　宗郎

目つくれ立寄ちるまゝれ　寫成

常夏や中ね敷は形れ葉ん　水臺

出るまでもつゝ一羽けるか　天外

まゝをは鶉の声物枝れむ　濱之旅

戸明よふもうらあらや月の影　舜甚

植年やのひて霧ゝ見る　花溪

古池飛人立鳥の中　新甫

揚もて羽吹きてくる　菖麿

うち地やし桂やうなる　菓瓢

浮草もや流れゆきかよふ所あり　きく雅

咲ものや岸にあまる二つ所り　白起

樹ある人ミへ縁にすゝぐ身は秋の風　卜早

桐ひと葉二葉ちる月さし入れ　かつえ

日あたりは寝れかねるやうすかな　稿市

たゝかふ蚊ひとつれ虫の声　世大

きのふもけふも鐘の聲の音　尚木

月見るに庵出て青き前へ中之谷　鷗

新雨模様に言あけやすし　村

なれぬ身の枯の側へ持参る　誠

勤々梅咲ならん足　雅　曉

緋植えぬもし梅も二三輪　叔

おもしろき事ありまさしく見　替

人形のあはれ花へ思ひ縁は　外

すきと知られぬ文ぞよき鞋　鶴

長まへうしろ向に出て耳とおく　村

名さく蕗ゑに吹く川載　誠

ひとへ梅花のみ國は年つるお　曉

萬籟は形しきる軒かく　叔

言葉もいそぎおいくたるまゝを　誓

ちとせの年も小縫刀おもお　外

雨あらう井戸八幡ゆくきり書きて　露

猿の聲は[illegible]て讃すゝめ[illegible]　村

於皆漁園興行

追善俳諧首尾吟

霜ちる人を時雨の後の秋ゆり　由[illegible]居士

月おちて垣まてしらぬ秋の露　秋曉

猿声の茅の葉や芒葉れ嘶く事　尾村

うしろの茅の猿の舟ゆきん　樹石

壹物をなしてきみよゑ無れたん　波鷺

諫なおとん馬れ嘶く　於叔

星に影宿りしよ水の色　完路

おきてきし徳きこの庭草　花外

たつ秋の草は何も七夕よあれ夜　暁

こほりし菓も筆もありける　村

所於もの月の子守らに踊佛　石

常盤子に秋や霧の里ぞ後府　波

提灯の光きよ始めて夜の酒　叔

ろうそくの灯の名人殊よ出す哉　完

時雨まちにもある船中の趣　外

夕暮の白きをもそむる蓮の鳥　麹峯

亡師追悼

行人も船よりしらぬや秋の暮　抛深

たまりし木月さへ度しれ君　尾村

咲まじる梅には桐の一葉　波鶴

傾く如月や我見けりたゞ客哉　梅石

中々の秋見て寒きれ宿の花　松暁

月をもれたる尾花の秋の雲　花外

男は山もやりきれぬあかねとれ　推叔

後さきとんぼの道あきて見る　完鶴

為誰庵由誓老人は芭蕉翁のふるき風俗を志のひ
世にあらはれ名ある東の橋の渡りを得られ道をと
もなひこの門に入り十市の里に住て文かよはせ志る
ころよふ哲翁道に心をよせし渡りて八人の門士
こきいはせからひ合せてさし定におもむくに吟の
百員と出て吟の百員あつまりて連衆の因戸
元来始に雪の園生につもりて果るまでに五百員に
満ちたるは風流男の本意なきかなしき有此中に

哲言良いぬる蜻蛉のとりわけ上枯の艸の葉住なさ
けち(消)て弁硯の料に入ぬるを空しく残せし人の友垣
うしなはぬときは絶えず者は多く俳諧の門の川そなかれはな昭の
いなをもいは沢ひ立て彼吉貞へ追加の句とも手向
たゆと水茎にて見る桜本まえり出しぬまた泉下の邑路が
此流を理るうれしさは寿延けるの長月なり
俳道の本にも好らは洗波の師名へはのりて其
こひすを見きいはまことやたゝ雫有てそら那りぬ